

## 読書の勧め

榊原和久

2018年3月18日（木）に化学系の皆様に、“定年退職者の送別会”を横浜・ホテル・ザ・ノットで開催いただき、今までに無かった程、褒めていただき、うれしいやら、照れくさい思いを経験してから早4ヶ月が経ってしまいました。在職中は、いつも温かい目で見守りいただき、多大なるご支援を賜りました事を真に有り難く思っています。この場をお借りしてまず、御礼申し上げます。

私の、4月1日以降の生活を報告させていただくと、5月のゴールデンウィーク明けまでは、毎日、大学に來させていただいて、私が使用していた居室（620室）の後片付けを行い、その後は、時間の余裕のあるのんびりとした毎日を過ごしているという事になります。私のような老人が多くなった現在、もっと年齢を重ねた、親の世代の介護を、自身の老後の生活を考えながらしなければいけない状況ですので、どのように日々を過ごして行けば良いのか、十分に考えながら過ごしています。若い世代の方々に大きな負担を掛けたくないよう、自身の健康に留意し、体と頭脳を“健全な状態に保つ”よう心がけています。

ゆっくりと自分の時間を使えるようになって最近思うことは、「学術論文をもっときちんとじっくり読まなければいけなかったな！」ということです。学術論文には最新の科学情報が詰まっているのですから、それらをしっかり理解するには、背景となる科学知識が頭の中に入っている必要があります。また、情報化時代の現在では、関連すると思われる学術論文は、コンピューター検索で幾らでも出て来ますから、それらの重要度を判定し、選別するには多くの時間が必要となり、本当に大事な論文に辿り着いた時は、そこで一安心してしまい、内容を正しく理解するための熟読の時間を十分に取っていなかったなと反省することをしきりです。座って、本や学術論文をゆっくり読む機会が増えて、様々な頭の良い先人の書いたものを読んでみて、立派な仕事をされた方は、読書を良くされ、自分が行った研究結果を上手に纏めて著作物として世に出しているなど感じました。皆さんは、南方熊楠（みなかた くまぐす：1867年4月15日～1941年12月29日）という人をご存じでしょうか？和歌山県が生んだ偉大な科学者で、知識欲旺盛で興味ある分野には、どんどん踏み行って関連図書を読みあさり、明治の時代にアメリカやイギリスに勉強に出掛け、科学雑誌「ネイチャー」



に幾つもの論文を発表しています。驚くべき事は、その研究対象分野の幅広さで“おもしろい”と思ったことに対しては、積極的に関係する書籍を読んで頭の中の引き出しにきちんと整理して科学の本質をつかみ取って行ったことにあります。熊楠自身は、無位無官の身でありながら、昭和4年6月1日、昭和天皇に対して“粘菌や海中生物”について御進講申し上げ、自身で採集した粘菌や海中生物についての110種の標本をキャラメルボール箱に入れて献上したそうです。天皇陛下は献上された標本をたいへんに悦ばれ、1962年（昭和37）5月、昭和天皇・皇后両陛下、南紀行幸啓の際、白浜の宿舎より、30余年前に訪れた神島を望見され、

「雨にけふる神島を見て

紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」

と歌を詠まれています。

純粹に科学の面白さに惹かれ、読書と熟慮、実験・実習を十分に行うことで、科学の興味ある事実を、解り易い文章で世の中に発信して行ければ、科学者として非常に幸せであると思います。自身を省みてみれば、私の指示で実験を一生懸命して下さった学生さんに、十分な学術的な背景や関連資料を適切に提供し、その研究結果をきちんと発表したかという事に関しては、申し訳なさで一杯です。学術論文にする際の英語の拙さについては、自身の能力の無さが一番の原因ですが、英語にする前の日本語で“ストーリー作り”を行う事の未熟さに関しては、若い頃からの読書量が十分で無かったことが一番の問題であったと今になって反省をしています。読書時間を十分に取ることができるこの歳になって、もう遅いかもしれませんが、夏目漱石の著作名文を読み、解り易い文章が書けるようになりたいと思うこの頃です。若い学生の皆さん、日本語文書作成能力をもっと磨くと、これからの人生が大きく発展すると思います。

## 退職にあたって

浅見真年

本年3月に横浜国立大学を退職いたしました。平成2年(1990年)10月に横浜国立大学工学部に着任して以来、平成もあと少しとなるまで、いろいろなことがあった「平成」時代の大部分を(理)工学部で過ごしたことになります。この間、同窓会の皆さま、とくに前身も含めた国大の応用化学科、材料化学科を卒業されて、国大の教員になられた先生方には、多々ご指導、ご支援いただきました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

私は、工学部に異動する7年半前(昭和58年(1983年)4月)に、教育学部化学教室に採用していただきました。化学教室には、以前工学部で助手をされていた栗原良枝先生がおられて、栗原先生は天然物有機化学、私は有機合成化学と言うことで一緒に有機化学を担当させていただきました。栗原先生には、研究室の立ち上げから学生の指導、研究費のことまで、一から十まで大変お世話になりました。在籍中、研究室はほとんど卒業研究の学部4年生が2名でしたが、化学教室は研究活動も活発で、学生さんも皆さん頑張ってくれました。ただ、最新の論文に関する情報や専門分野の勉強については、私を含めて3名ではできることが限られると思ったので、専門分野の近い工学部の佐藤菊正先生、宮本統先生、井上誠一先生にお願いして、研究室の雑誌会、輪講会に出席させていただき、勉強させていただきました。

平成2年10月に工学部に異動してからは、井上誠一先生の研究室で、しばらくしてからは本田清先生も一緒に、平成10年(1998年)3月まで教育、研究をさせていただきました。自分の好きな研究テーマで仕事をしてよいと言っただき、大学院生の頃から教育学部時代をとおして行っていた、光学活性化化合物の効率的な合成法である「不斉合成反応」に関する研究を続けさせていただきました。多くの優秀な大学院生の方が多大な努力をしてくれて、この頃に発表した論文が私にとって最も引用件数の高い論文になっており、有機合成化学や立体化学の教科書に記載してもらうなど、充実した研究生活を送らせていただきました。平成10年4月から平成13年(2001年)3月までは、教員としては一人だけでし



たが、平成13年(2001年)4月から平成25年(2013年)3月までは細田尚也さん(現文部科学省)、平成25年10月からは伊藤傑さん(現准教授)と一緒に教育、研究をしてくれました。大学では近年「改革」、「改編」が日常茶飯事のようになっていますが、平成12年頃から私にも改組などの仕事が回ってくるようになりました。巡り合わせの役目もあって、平成13年(2001年)の大学院部局化、平成19年(2007年)の二部募集停止、平成23年(2011年)の理工学部設置、平成30年(2018年)の理工学府設置のときには、研究室にいないことも多くなってしまいました。細田さん、伊藤さんには無理なお願いをしたり、いろいろ迷惑をかけてばかりでしたが、いつも助けてもらい、心から感謝しています。博士課程後期を修了した学生さんはもとより、博士課程前期、学部で卒業した学生さんにもいろいろ助けてもらいました。また、教育、研究から管理・運営業務に至るまで化学系の先生方に多くのご助言をいただき、ご指導、ご協力をいただきました。字数の関係でお一人お一人のお名前を記すことができませんが、厚く御礼申し上げます。また、歴代の事務室の職員の皆さまにも大変お世話になりました。どうもありがとうございました。

退職後の4月からは、いくつかの大学で非常勤講師をさせてもらい、結構毎日忙しく過ごしています。非常勤をしていると、国大生は優秀だとあらためて感じます。今後も優れた先生方のご指導の下、素晴らしい研究と優秀な卒業生、修了生を輩出され、横浜国大の化学系および国大化学会がますます発展されることをお祈りしています。

## 退職のご挨拶

横山 泰

退職に際しての挨拶文を跡部先生から依頼され、さて何を書いたらよいだろうか、としばし考えました。というのは、私は2018年度一杯、先端化学ユニットのご厚意で今まで使っていた居室・実験室を使わせていただき、交付を受けている科研費で研究を継続しており、以前と大差ない生活を送っているからです。2018年3月末をもって退職はしたものの、あまり実感がなく過ごしています。違いと言えば講義と会議がなく、その時間を、ややこしい議論が必要なために手をつけられずにいたいくつかの論文書きにあてることができて、高く評価されるような論文（Featured Article に選ばれるとか、論文の内容を表した絵を掲載号の表紙に載せるように依頼される、など）を書くことができます。

さて、改めて私の来し方を振り返ると、若かりし頃のことは遙か遠方に霞んで、もはや鮮明に思い出すのも難しく、唯々ずいぶん長い道のりであったなあ、と思います。そして、無事退職に至ったことについては、横浜国大でお世話になった諸先生、研究室で共に過ごした学生諸君、事務の方々、学会関係でお世話になった諸先生、そして家族のおかげであり、大いに感謝しております。

理学博士号を取得したばかりの1980年4月、私は故栗田雄喜生先生（2017年10月8日ご逝去）のもとで助手として横浜国立大学工学部材料化学科に奉職し、横浜国大の教員となりました。以降、学科再編、大学院部局化、国立大学法人化、理工学部設置、などの組織改編を経験しながら、2018年3月までの38年間、横浜国大のお世話になりました。

その間、1985年8月から1986年9月まで、米国ペンシルバニア大学に博士研究員として、また1996年3月から8月まで、中国およびヨーロッパ各国に文部省在外研究員として、海外で過ごさせて頂きました。その際には、長期の不在の間の講義や学生実験などの穴埋めで栗田先生と伊藤卓先生に大変お世話になりました。おかげさまで、その後の研究生活に大変役立つ経験を積むことができ、また、現在に至るまで20年、30年と友人関係であるような国際的な人脈を築くことができました。昨今の化学系の若手教員を見ていると、教員の数の問題もあるでしょうが、海外に出て行く人が少なくなっているように



思います。若手教員には是非海外での研究と生活を経験し、その後の教育研究に役立ててほしいものだと思います。

さて、着任後栗田先生と色々研究の話をして、物理化学の栗田先生と有機化学の私とで面白い研究ができるのではないかと、ということになりました。それがフォトクロミズムという、光で可逆的な構造変化をする現象の研究です。私が分子の合成を受け持ち、栗田先生がその分析・解析を行う。実際には1982年度からフォトクロミズムの研究を始め、その後現在に至るまで37年間続くことになったわけです。フォトクロミズムの研究は面白くて夢中になりました。現在化学系では生方俊先生はじめ数名の教員がフォトクロミズム関連の研究を行っており、今後横浜国大において益々活発になるものと思って期待しています。

横浜国大の置かれた環境、教員の教育研究に携わる環境は、残念ながら時代と共に良くなってゆくというわけにはいかないようです。それでもありがたいことに、横浜国大で学びたい、化学を志したい、という若者が毎年来てくれています。厳しい環境の中で、そのような若者を立派な社会人になるように教育し、やがて卒業・修了して国大化学会のメンバーとなってゆく過程を見守り寄り添う教員を、国大化学会として今までにも増して支援・応援していただけたらと思います。

仰げば星斗蘭干らんかんとして聳そびえたり

伏して思う人生一棋局

私はすでに教育研究の場からほぼ退場した身ですが、皆さまにおかれましては、健康には十分に気をつけてますます活躍される傍ら、国大化学会の活動にも末永くお励み下さい。